

## 朝鮮における集千家註系杜詩について

—『杜詩諺解』における杜詩解釋の系統研究序説—

成澤 勝

### 1 はじめに

歴史的に杜甫の詩は、陶淵明・蘇東坡らのものとならんで朝鮮では最も好まれた。しかも時期による“住み分け”も認められる。高麗期には、杜詩はある程度知られており、一定の受容がなされていたことは、例えば後述の「翰林別曲」や、あるいは李仁老（一一五二～一二二〇）の

琢句の法、唯少陵獨りその妙を盡くす<sup>1)</sup>。

等からも分かる。しかし、詩風の人氣から見れば壓倒的に蘇東坡ら宋の詩が一世を風靡した。やはり李仁老はこの言に繼いで

蘇黃に至れば則ち使事益々精にして、逸氣横出す<sup>2)</sup>。

といい、あるいは林椿（高麗仁宗代）は

僕、近世東坡の文の大いに時に行はるるを觀る。學ぶ者、誰か服膺呻吟せざらん<sup>3)</sup>。

またあるいは李奎報（一一六八～一二四一）は

今古以來、未だ東坡の盛行して尤も人に嗜まるるに若かさるものなり<sup>3)</sup>。

という。こうした宋詩、特に蘇東坡らの人氣は李朝前期まで續いたかの感があるが、ただ李朝前期は『分類杜工部詩諺解』二十五卷（以後『杜詩諺解』と略稱する）刊行に見られるように杜詩に對する關心が高揚し、後の杜詩流行に先立ち杜詩研究すなわち學杜の風が起ころ。但し、杜風が流行するのは李朝中期からといえよう。例えば、李朝中期の沈守慶（一一五九～九九）は

余少き時、士子の古詩を學習する者、皆韓詩東坡を讀む、其れ來れるや古し。近年の士子は韓蘇を以て格卑と爲し、棄てて讀まず、乃ち李杜の詩を取りてこれを讀む<sup>4)</sup>。

こうした狀況が一般的であつたようである。また特に學杜の風という面では、中でも爲政者側の杜詩評として、この『杜詩諺解』の曹偉序や『補閑集』にも見られるように君臣の義等を説く倫理的色彩が強かつたようである。杜詩の最初の全集的集大成は、『舊唐書』によればすでに唐代に六十卷本が存在したと言われるが、現存しない。今確認し得る最古のものは宋の王洙編の『杜工部集』二十卷本であるとさ

れている。以後の杜集はおよそこれがもとになる。そして、それらに確認できる篇数は千四百七十首餘りで、そのほとんどが李朝初期までには傳來していたと言つてよからう。しかし、後述するように高麗時代における流布盛行の迹は見られず、さほどには讀まれなかつたと思われる。その理由は、やはり難解さであろう。すなわち千四百首以上の詩篇はいずれも、そのときどきの杜甫の生活や時代、社會そして地理・風土を反映しており、そうした情報（註）の細密なところまで讀者に具備・諒解されていないと、解讀は不可能なのである。現在、韓國では高麗期の覆刻杜詩集の存在を説く研究者もいるが、彼らの言うところの杜集はいずれも李朝の刊である。また、天理圖書館所藏の『杜工部草堂詩箋』も、所藏記録では高麗刊としているが、『李朝刊』となすべきであろう。同様の版本が北京大學圖書館にも藏されているが、天理圖書館所藏本に比べ版木の摩滅が進んでいるようであつた。

李朝に入ると、朝鮮において杜詩集の刊刻が頻繁になされた。こうした方面の研究は沈慶昊氏の一連の業績群に詳しい。それらの中から沈慶昊（1992）によつて、朝鮮覆刻あるいは朝鮮編纂の杜詩テキストト群をここに整理してみる。ただし、相當量にのぼるので『杜詩諺解』重刊本の編まれた一七世紀初葉までのものに限る。書題等は一且沈氏の記すところに従う。

(一) 『杜工部草堂詩箋』四十卷、一四三二年、木版覆刻（慶尙道密陽私刊）。

(二) 『黃氏集千家註杜工部詩史補遺』十卷、一四三二年、木版覆刻（慶尙道密陽私刊）。

(三) 『纂註分類杜詩』二十五卷、一四四四年、甲寅字（集賢殿の受命撰）、以後數次にわたり改版（甲辰字、丙子字、訓練都監木活字、

朝鮮における集千家註系杜詩について

木版等）。

(四) 『虞註杜律』二卷、一四七一年、木版覆刻（忠清道清州私刊）、以後一五八五年の江原道旌善冊版の『杜律虞註』等。

(五) 『杜詩范德機批選』六卷、一五〇一年再刻（初刊年未詳）、木版覆刻（黃海道海州私刊）、以後一五二八年の重刻等。

(六) 『分類杜工部詩諺解』二十五卷、一四八一年～一五〇四年、乙亥字（柳允謙ら受命撰）、以後一六三二年には木版重刊。

(七) 『趙註杜律』（未見）、一五四〇年、版別未詳。

(八) 『杜工部五言律詩』四卷、刊年未詳、木版（前項のものか？）。

(九) 沈氏假稱『草堂註杜工部排律』（未見）、一五四〇年、版別未詳。

(十) 『須溪先生批點杜工部排律』、刊年未詳、乙亥字（前項のものか？）。

(十一) 『讀杜詩愚得』十八卷、一五四九年、乙亥字。

(十二) 『須溪先生批點杜工部七言律詩』、明宗朝、乙亥字。

(十三) 『范太史精選杜詩』卷一および卷二、一五七六年、乙亥字、『杜詩范德機批選』に草堂註を加えた刊本。

(十四) 『杜少陵先生詩集註抄』、一六〇九年～二三年、訓練都監字。

(十五) 『杜工部文集』二卷、刊年未詳、訓練都監字。

(十六) 『纂註杜詩澤風堂批解』、一六四〇年、板刻は一七三九年（慶尙道大丘私刊）。

となる。沈慶昊氏によるこれらリストの中には、テキスト自體の調査なしに擧げられているものもあつて、詳細についてはいまだに精査の餘地を残すものである。

例えば、美麗な乙亥金屬活字で刷られた(十三)の『范太(大)史精選杜詩』は卷五までの二百七首が洪禹欽氏によつて發見されてお

り、この元となつた『杜詩范德機批選』がすでに李朝定宗代の一四〇〇年に、朝廷において論議されていることが本論攷の過程で明らかになつてきた。すなわち、これは、鄭鼎の抄する杜詩三百首、と言われ、人君たる者の習うべき古詩として知經筵事李詹によつて進められていたのである。こうした、朝鮮での覆刻・編纂テキストの詳細な調査、そしてそれに基づく各本の特徴および各本間の關連や系統も今後不可欠な研究課題とならう。

## 2 解釋史面からの研究の必要性

『杜詩諺解』その一部かそれとも全部かについては疑問のあるところではあるが、原刊本は一四八一年に出され、重刊本は一六三二年に成つた。この學術的價值はひとえに語學研究の方面から注目され、中でも原刊本はもつぱら朝鮮中期語研究の立場から扱われてきており、またこの方面では確かな研究業績が相當數出されている。

しかし、本來杜甫の詩はその規模からしても世界的な文學であり、藝術である。李朝にあつても歌謠面で、漂泊の詩人鄭澈らを始め、多くの詩歌人たちに影響を與えた。當の漢土では十一世紀以來、また周邊諸國でも早くから杜詩全體に對する體系的な注・解・評類が加えられてきた。實はこの『杜詩諺解』はそうした中の最大級のものであつて、中國では、朝鮮諺文によつたものという言語的障害もあつて解讀になかなか踏み込めずにいるが、しかし杜詩テキスト史上においては確實に注目されており、杜詩解釋上にしかるべき位置づけが求められてきているのも事實である。更に、漢土の諸注を比較軸となしつづ、そうした朝鮮独自の解釋を検證していくことによつて、朝鮮的審美の世界をも解明していくに足る、朝鮮藝術研究上の格好の資料でもある。

すでに『杜詩諺解』の解釋史的研究は不可欠になつてきているが、こうした、『杜詩諺解』に對する解釋論的アプローチに先行して不可欠なのが、『杜詩諺解』とそれに先行する漢土の諸家の注との綿密な對比照合作業である。しかし、先行諸注とはいつても系統的に『杜詩諺解』と關連してくるものでなければならぬ。明らかに諺解者たちが襲つた注でありながら、しかし別様の表現で諺注を施したもの、或いは微妙に含意を變えているもの等が注目されなければならず、そのためには網羅的な分析・検討が必須となる。目下、新たな方向の模索が求められている中期語研究も、こうした解釋の定着を基盤にしていくことによつて、更に深さと幅が加わるだけでなく、細密さを増し、未解決部分の解明に大きく貢獻するものと考えられる。現に論者は早くにそうした視點からの接近を試みたことがある。

まず、『諸本』對校分析に先立ち、必然的に『杜詩諺解』に先んじて漢土および朝鮮での流行『諸本』を索出し、それらを書誌面から整理する必要がある。韓國内でのこうした試みの研究は未だ見ていない。前述したように最近になつて唯一沈慶昊氏に一連の韓國内杜詩テキストの研究があるが、漢土の先行本に關する整理がない。また、他は一九五〇・七〇年代に李丙疇氏・全在昊氏に若干の文獻研究・字句解釋があるのみである(李丙疇氏の論は一九八二年にも出されたが五八年のもの、再論の域を出ない)。字句解釋という方面では非常に綿密な中期朝鮮語面からの考證によつて李賢熙氏・李浩權氏らの新たな試みも見られ、加えて臺灣から、文獻處理面では全く李丙疇氏を襲う『韓國詩話中有關杜甫及其作品之研究』なる一書が出されているが、誤謬が多く參考とはなしえない。

この場での限られた枠の中では、『序説』的に、高麗から李朝初期

にかけての杜詩の扱われ方を整理し、更に韓國のみならず、中國や日本  
の研究者の業績を點検することによって、『杜詩諺解』およびこれ  
に連なる李朝刊（或いは編）の杜詩テキストと漢土のそれらとの關連  
づけを行つてみたい。

これらの詳細な系統關係はテキスト本文の網羅的な校合作業による  
研究を以てようやく判斷しうるものであつて、小稿段階ではそこまで  
踏み込むことはできない。ここでは先ずそうしたテキスト群の中で、  
朝鮮ではついで流布通行が確認できない、元・明および日本での人氣  
本の『集千家註系』二種すなわち『集千家註批點杜工部詩集』および  
『集千家註分類杜工部詩』に注目する。

### 3 集千家註系杜詩と朝鮮

元槩の須溪劉辰翁（一二三二～九七）の批點（以後「劉批」と稱する）  
本は、『須溪批點選註杜工部詩』二十二卷、『集千家註批點杜工部詩  
集』詩二十卷文二卷がその主なものであるが、『集千家註分類杜工部  
詩』は余志安の勤有堂刻本（一二三二年）に至つて、ようやくその「集  
註杜工部詩姓氏」の末尾に「時賢廬陵劉氏」を挙げ、

會孟、字は辰翁。子美の詩を批注す。

と、劉批の存在を明示するものの、これを載録しない。また、『須溪  
批點選註杜工部詩』については、『集千家註批點杜工部詩集』の劉將  
孫（辰翁の子）序に

吾が家名を藉りて以て世を欺く者……

というように、劉批とは距たりのあるものであつた。したがつて、劉

批本としては『集千家註批點杜工部詩集』が最もその姿をよく示して  
いると看るべきである。

劉辰翁の著作類が朝鮮でも非常に大きく人氣を博したことは、現在  
韓國の到處の藏書施設に高麗李朝期導入の、劉辰翁詩・文・評類が多  
數確認できることから分かる。ところが、ここで言うところの「集  
千家註系」すなわち『集千家註批點杜工部詩集』『集千家註分類杜工  
部詩』が一本も確認できないのである。つまり、『草堂詩箋』などは  
覆刻されているが、これら「集千家註」系は宋・元からの輸入とい  
う形であれ、朝鮮獨自刊行であれ、すでに述べたようにこれらが朝鮮  
で流布した形跡は見られないのである。この點、流行本として大いに  
流布した元や日本とは非常に異なり、本論攷において問題とすべきと  
ころである。

まず『集千家註批點杜工部詩集』について整理してみる。

本書は、劉批の付された杜詩を高崇蘭（字楚芳、一二五五～一三〇八）  
が集注しつつ、魯嘗の編年式を襲つたもので、その成立の經緯は、辰  
翁の子劉將孫の序に詳しい。

この高本より早くやはり劉辰翁批點本への羅履泰序、彭鏡溪集注、  
廬綸後序（これは二〇〇年以上も後に付されたもの）による『須溪批點  
選註杜工部詩』二十二卷があつたことはすでに觸れた。しかし、そこ  
で述べたように將孫はこれを「吾が家名を藉りて以て世を欺くもの」と  
と批判し、高本の優位を主張した。以後、壓倒的に高本が流行して  
いった。元明期において何故この高本が最も盛行したかについて、黒  
川洋一氏は高本の注の簡明さを擧げる。すなわち、萬事に煩瑣を嫌つ  
て簡明さを喜んだ元明期の風潮に合致したと説く。小稿のテーマに深  
く關わってくる重要な指摘なので、敢えてここに特記する。

この高本は、廣く世に好まれただけに版本は多い。黒川氏はごく初期のものであろうとして雲衢會文堂校刻本を擧げるが、周采泉氏はそれに五年（あるいは六五年）先立つものとして大徳七（一三〇三）年の原刻本を擧げる。更に、明代になると高本ではあるが無批點本の『集千家註杜工部集』も現れる。ちなみに、周采泉氏の調査を見ると元朝のものだけでも他に九種が擧げられており、流行ぶりがしのばれる。なお、論者が見たのは、會文堂本序目を、元坊刻本（？）詩集に合綴した天理圖書館所藏本、およびその影印本、更に靖江王府刊本（嘉靖八年）の大通書局影印本である。天理圖書館所藏本は五鍼眼で、紙が朝鮮紙のようにも思えた。

次に、『集千家註分類杜工部詩』について整理してみる。

父黄希の撰を承け、子の黄鶴が補注を付して十三世紀初葉に成つた『黄氏補千家集註杜工部詩史』三十六卷があるが、この黄鶴が『門類杜詩』二十五卷における徐宅（字居仁）の分類式の編次を採つて成つたのが『集千家註分類杜工部詩』と言われる。この成立に關して島田翰は「宋槧本考」において考證したが、洪業らによつてその誤謬が指摘され、このテキストは「欺世之陋本」であつて、偽書とされている。しかし、宋から元にかけて流行し、刊刻が重ねられた。南宋期一二三二年のいわゆる素心齋刻本以來十五世紀までの版本だけでも、

素心齋刻本 一三三一年  
 勤有堂刻本 一三一二年  
 圭山書院刻本 一三四八年  
 積慶堂刻本 一三四八年  
 廣勤堂刻本 一三六二（或いは一三〇二）年  
 等が周采泉氏により擧げられている。

以上のように、宋末から明初にかけては、これら集千家註系の二種が壓倒的に人氣を博していったのである。

#### 4 朝鮮における杜詩受容史上の二つの疑問

日本においては、體系的杜甫詩集としての本格的な受け入れはこの『集千家註批點杜工部詩集』であり、五山版の杜詩集として新たな姿を現した後も、江戸期には重ねて覆刻されていった。まさしく、學杜詩のテキストとして最も高い評價を得たからであらう。それは漢土においてと同様である。また、すでに述べたように『集千家註分類杜工部詩』も日本刻本が室町期に出され、漢土にも版本は多い。

にもかかわらず、朝鮮においてはこの元刊の『集千家註批點杜工部詩集』および『集千家註分類杜工部詩』は流布が確認されない。高麗末から李朝にかけて、當然相當の評價が爲されたであらうはずなのに、いずれの藏書にも見出すことが出来ないのである。明代にあつては劉辰翁の批點は、明刻の『集千家註批點杜工部詩集』諸本、およびすでに初めに觸れた彭鏡溪集注本の翻刻と思われる正徳年間刻本で『須溪批點選註杜工部詩』があるが、十五世紀以前（すなわち『杜詩諺解』以前）においては、これらはいずれも朝鮮ではまとまつた量の輸入や覆刻が爲されなかつたと見ざるを得ない。しかし、劉辰翁の評點を非常に好んだ當時の朝鮮にあつて、杜詩の劉批が通行しなかつたとは考えられない。現に、やや下つて十六世紀前半の記事ではあるが、魚叔權（中宗、明宗代）はその『稗官雜記』で、すでに認められている劉辰翁批點の優越性を説いている。

## 5 『纂註分類杜詩』の出現

李丙疇氏は杜詩の船載年代を新羅統一（七世紀後半）後の遣唐使によつて、まずもたらされたというが、いささか無理な見解であらう。杜甫は七十二年生まれの八世紀の人物であり、今言われているのでは最初の杜詩集である『杜甫文集』六十巻が出るのは更にその後と考えられている。

高麗歌謠として朝鮮文學史上よく知られた「翰林別曲」の中には、文化人にとつての基本素養書目として、韓愈・柳宗元の文集、白樂天集と並んで、李杜集が詠まれている。また、同じく高宗代（一一二四～五九）の『東國李相國集』には「唐書杜甫傳史臣贊議」の一文が確認され、杜詩集の中のどれくらいの詩が、どれほど廣くかは不明ながらも、一部知識人の間ではかなり讀まれていたといえよう。しかし流布の状況については、十三世紀前期のこの時點では、相當廣範圍に全集の規模で流布していたとは考えられない。更に下つて『高麗史』韓宗愈列傳によれば、韓宗愈は忠穆王の李白・杜甫の詩を讀みたいという願ひに對して、政事の役に立つものでもなく、またその方面の擔當も無いという理由で進上しなかつた。十四世紀中葉のことである。こうした、政事上の杜詩無用論は李朝に入つてからも朝廷では權近（一二三五～一四〇九）らにより繰り返された。つまり、朝廷レベルでは杜詩をさほど重視しない風潮が嚴然とあつたことが分かる。しかし一方ではこうした史書等の記事から王の杜詩學習意欲も察せられ、こうした意欲に應え、同じ時期、人君たる者の習うべき古詩」として杜詩を経筵に進めようという主張も現れてくる。

そして朝廷ではついに杜詩集刊行が決定され、いよいよ朝鮮独自の

朝鮮における集千家註系杜詩について

テキスト『纂註分類杜詩』が編まれることになる。すなわち、朝鮮覆刻あるいは朝鮮編纂の杜詩テキスト群として整理し一覽提示した（一）（二）の『杜工部草堂詩箋』および『黃氏補注杜工部詩史補遺』は民間（寺刹）で出されたものであつたが、朝廷でも杜詩に關する議論が高まり、また杜詩集獲得策が本格化し、世宗代（一四一九～五〇）には國家レベルで杜詩の諸家注の蒐集纂定が推進されていった。この過程で具體化されていったのが、この『纂註分類杜詩』およびその成果の上に立つた『杜詩諺解』の發刊であつた。李丙疇氏は『纂註分類杜詩』を元の高崇蘭の編となしたが、沈慶吳氏の考證の通り、實際は李朝初期の安平大君・柳休復および辛碩祖ら集賢殿スタッフたちの編で、世宗代の一四四四年に上梓されたものである。卷構成の體裁や分類式の編次は『集千家註分類杜工部詩』を襲つている。

この書誌面については、錯覺による若干の混亂を來しつつも、上述の沈慶吳氏の業績群に説かれる。小稿のテーマからまず問題とされなければならぬのが、李丙疇氏の錯誤であるところの高崇蘭編説である。李丙疇氏はこの『纂註分類杜詩』を高崇蘭編と認識しつつも、一方で『集千家註批點杜工部詩集』（書名のみか？）を知つていた。すなわち一九八二年の『杜詩研究論叢』の中で彼は『集千家註批點杜工部詩集』二十巻高楚芳編を擧げ、別有朝鮮王朝版」という（事實はこれに朝鮮版は無い）。ところが、彼のこの記事に續く「歴代所刊杜詩書一覽」の表には、高楚芳編となした『纂註分類杜詩』はあつても、この『集千家註批點杜工部詩集』は載せられていない。つまり彼は『集千家註批點杜工部詩集』と『纂註分類杜詩』を同じものと誤認したのでは無かろうか。しかし、兩本は確實に別物である。最大の相違點として、『集千家註批點杜工部詩集』は高崇蘭によるその編次が魯豈系

の編年式であり、注は極めて簡略であるのに對して、『纂註分類杜詩』はその編次が、すでに述べたように徐宅（字居仁）系のモチーフ別分類による『集千家註分類杜工部詩』の體裁を襲い、割注は「公自注」以下五十家以上の注釋・解釋・評語・校勘等を付した、極めて煩雜なものになつてゐる。そして、この中で注目されるのが劉批を載録し、しかもそれら多くの注解類を擧げつつも、初卷卷首には特に「廬陵須溪劉辰翁批點」と掲げ、その批解は常に第一に扱われる。すなわち、元・明の流行本『集千家註分類杜工部詩』は、やはり人氣の劉批をも取り込んだ形に姿を變えて、朝鮮ではあらたに編み直し、別本として刊行していったのである。

小稿で課題とした、當代最も盛行したところの杜詩集『集千家註批點杜工部詩集』および『集千家註分類杜工部詩』の朝鮮における流布が確認できない理由は、ここにいたつてようやく理解されてくる。すなわち、日本におけるような單なる覆刻ではなく、一定方向に向けての完全な作りなおしであつて、新たに『纂註分類杜詩』という杜詩全集を創出していったのである。しかもこれはその社會に大いに歡迎され、美麗な甲寅金屬活字以來訓練都監木活字を経て更には木版によるものまで、二百年以上も刊刻されつづけたのを見ると朝鮮社會で相當に通行したものと見えよう。これがもとになつて、一七世紀には李植の『纂註杜詩澤風堂批解』にも受け継がれていったことを、併せて觸れておく。

## 6 劉批の導入

漢土の流行を的確に把握し、杜詩集としての優越性を認識して、分類式の『集千家註分類杜工部詩』を導入したのには理由が考えられる

が、それは以後の論議に譲るとして、むしろそれをそのまま覆刻してこと足れりとしなかつたのは、一旦多くの諸家注を閲する必要があること<sup>(4)</sup>で、とりわけ劉批の導入が求められていたからであるうと思われ。それは、この『纂註分類杜詩』の中で劉批が諸註の中核に据えられてゐること、あるいは前々節で述べた魚叔權（中宗・明宗代）の『稗官雜記』の記事に見える、劉批への評價等からも理解できる。すでに觸れたように劉辰翁の詩文・評語類は、當時の朝鮮では實に氣に入られていた。同様に杜詩においても劉批はまさに朝鮮の詩文的嗜好にしっかりと合致し、取り入れざるを得なかつたのである。まずはその簡潔明瞭さが好まれたことは、『杜詩諺解』曹偉序や先述の『稗官雜記』の記事からも分かる。杜詩本文の用字も、詳細は今後の不可避な課題として精密な對校作業を俟たなければならぬものの、『纂註分類杜詩』はもつぱら『集千家註批點杜工部詩集』を襲つてゐると見てよらしいようである。

では、『纂註分類杜詩』においてはどのような経路で劉批が取り入れられていったと見られようか。それは、當代朝鮮で入手し得た杜詩のテキスト群の中から『集千家註批點杜工部詩集』の優越性を見いだし、底本としていったことも關連してくる問題である。すなわち、未だ指摘されていない、一つの記事が今重大な意味を持つてくる。

註や解・評を残したわけでもないが、當代にあつては學杜家の先鋒と自他共に任じ、杜詩を通じての交遊が廣く、杜風の大家と言われた牧隱李穡（一三二八・九六）の『牧隱文藁』卷之五に見える「石犀亭記」である。

この記事によつて、李穡の馴染んだ杜詩のテキストが劉批本であつた可能性を確認する手がかりを得ることが出来る。すなわち、彼

はこの「石犀亭記」で杜甫の「石犀行」の第十五句から最終句までを引用し、

是以杜工部作歌行。乃曰。但見元氣常調和。自免波濤ハク恣彫療。安得壯士提天綱。再平水土犀奔茫。(後略)

となす。ここでの「波濤」は實は「洪濤」となすべく、一五世紀以前のおよそ前述の『杜詩諺解』先行諸本はいずれも「洪濤」であるが、唯『纂註分類杜詩』および『集千家註批點杜工部詩集』のみが「波濤」となす。すなわち、李穡の手にあつたのは『集千家註批點杜工部詩集』であつた可能性が極めて高くなる。つまり、十四世紀後半にはすでに『集千家註批點杜工部詩集』が朝鮮に入つており、しかもこれによつて彼は朝鮮の杜詩學をリードして見たと見ることができよう。そしてこの代表的な門人に僧卍雨ウムがいた。『纂註分類杜詩』から『杜詩諺解』へと連なる杜集刊行において卍雨が如何に深く関わつていったかについては池浚模氏の所論ウにも詳しく見えるが、當代の文人の文集や實錄の記事からも十分に、その擔つた役割を充分に知ることができる。彼は、李穡との交流の中で杜詩を習得し、やはり李朝初期の學杜家の巨星として、安平大君らの『纂註分類杜詩』編纂事業に深く関わつていった。つまり、李穡は卍雨と並んで、『集千家註分類杜工部詩』系の『纂註分類杜詩』に劉批を流入せしめる経絡の要衝にあつたと見ることができよう。

## 7 おわりに

朝鮮での杜詩は、十七世紀にもなると編年式の編次に組み替えられ、分類式は顧みられなくなるものの、十五世紀朝廷に於ける政策的

朝鮮における集千家註系杜詩について

導入當初はその理由の如何は別論議としても分類式編次が採られて、『纂註分類杜詩』が編まれ、更にこれを承けて『杜詩諺解』が出される。こうした動きは、漢土や日本における場合とは大いに異なる。元明や日本では杜詩のテキストとして一定の人氣のもとに通行した集千家註系兩種(『集千家註分類杜工部詩』および『集千家註批點杜工部詩集』)が覆刻され、流布した。朝鮮では先行テキストを定めてそれを忠實に覆刻するようなことはしなかつたのである。註としては可能な限りを集めつつも、かの社會においては不可缺の、杜詩に求めた二つのテーマ、すなわち分類式編次と劉辰翁批點を兼備するものとして、『集千家註分類杜工部詩』からはその分類式編次を、また『集千家註批點杜工部詩集』からは劉批を取り独自の杜詩集を作り出したのである。そしてその『纂註分類杜詩』に諺文による独自の註を加えて、『分類杜工部詩諺解』という杜詩學習のテキストの典型を完成させた。

### 注

- (1) 李仁老『破閑集』卷上；琢句之法。唯少陵獨盡其妙。
- (2) 李仁老『破閑集』卷上；至蘇黃。則使事益精。逸氣橫出。
- (3) 林椿「與眉叟論東坡文書」(『東文選』卷五九)；僕觀近世東坡之文。大行於時。學者誰不服膺呻吟。
- (4) 李奎報「全州牧新離東坡文跋尾」(『東國李相國全集』卷二二)；今古以來。未若東坡盛行。尤爲人所嗜者也。
- (5) 沈守慶『遺閑雜錄』；余少時。士子學習古詩者。皆讀韓詩東坡。其來古矣。近年士子以韓蘇爲格卑。棄而不讀。乃取李杜詩讀之。
- (6) 曹偉「杜詩序」(原刊本卷之一は未發見で、その「杜詩序」(曹偉)は重刊本所載のものによる)；至於亂離奔竄之際。傷時愛君之言。出於至誠。忠憤激烈足以聳動百世。



また、崔滋『補閑集』卷中：孔子三月無君。則皇皇如也。杜子美在寒窘中。句句不忘君臣之大節。

(7) 金訢「翻譯杜詩序」：詩至於子美。可謂至矣。而詞嚴義密。世之學者。患者不能通。夫不能通其辭。而能通其訣者。未之有也。

金訢が『杜詩診解』の序を爲したことは『懷齋叢話』卷之八にも見える。この「翻譯杜詩序」は『杜詩診解』には載録されず（恐らく黨争の過程のいつかの時點で外されたのであろう）。今は『顔樂堂集』卷之二所収のものによる。

(8) 平成7年度朝鮮學會發表における論者の指摘後、李朝刊と訂正されているようである。いわゆる高麗本『草堂詩箋』で、李朝世宗十三年に曹致によつて覆刻されたものである。

(9) ①沈慶昊(1985)「朝鮮朝の杜詩集 刊行에 대하여」(『仁荷人文』第四輯、仁荷大學校、一九八五年) (同年の『韓國學報』三十八號にも同一論文)

②沈慶昊(1986)「李氏朝鮮における杜甫詩集の刊行について」(『中國文學報』第三七冊、京都大學、一九八六年)

③沈慶昊(1991)「麗末鮮初の詩僧 卍雨斗 義砧」(『東斗 西의 思惟世界』民族社、ソウル、一九九一年)

④沈慶昊(1992)『纂註分類杜詩』解題、(『纂註分類杜詩』影印版、以會文化社、ソウル、一九九二年)

(10) 沈慶昊氏は中宗二五年となすが、これは非で、『稗官雜記』四は、嘉靖庚子のこととなしており、すなわち中宗三五年に當たる。

(11) 注(10) 参照。

(12) 山口大學所藏本によれば、表題は『讀杜偶得』。この黄淮序の「弘治辛酉八月重脩」を以てのことか、クーランや前田恭作は刊期を一五〇一年となすが、しかし沈慶昊氏の疑えるごとく朝鮮乙亥金屬活字本成立はさらに後のことであろう。

(13) 正確な書題は『范大史精選杜詩』(洪禹欽氏發見本による)。

(14) 『第八屆域外漢籍國際學術會議論文集』(國學文獻館、臺北)

(15) 『定宗實錄』定宗二年八月丙申：上問於詹曰。豫欲覽古人詩如何。詹曰可。(中略)御經筵。同知事李詹進曰。項上欲覽古詩。爲人君者亦不可不習也。昔漢高祖製大風歌。武帝製秋風詞。下及于隋煬帝亦好詞章。然忌上人之才。故殺薛道衡王胄。鄭絳抄杜詩三百首。盡做詩之三百篇也。乞於經筵辯觀之。

(16) 杜詩解釋史上における診解の位置(價值) 付けに關しては、先行研究例もなく、韓國ではその重要性の認識は薄い。論者が一九九二年朝鮮語研究會で發表した折りにその場に居た若手研究者李浩權は、診解は本文の單なる直譯であつて……とコメントした。杜詩が、解釋もなく單純に翻譯できるわけがない。また、沈慶昊(1986) は、診解を初學者のための理解補助的解説にとらえる。中國古典は訓詁・解釋史の上に立脚しており、『杜詩診解』すらその大道に沿つて成り立つたものである。これまでこの『杜詩診解』がもつたら言語研究資料として認識されてきたことも一因であろう。しかしこの『杜詩診解』がそれまでの杜詩解釋史の上に成立していることは、この編纂に携つた一人でもある金訢の「翻譯杜詩序」の次の記述からも十分理解できる。すなわち、

『顔樂堂集』卷之二：其譯以診語。開發蘊奧。使人得而知之。於是臣某等受命。分門類聚。一依舊本。雜采先儒之語。逐句略疏。間亦附以己意。又以診字譯其辭。俚語解其義向之疑者釋。窒者通。子美之詩至是。無餘蘊矣。

(17) 成澤 勝「『杜詩診解』の新視點について」(『第六屆域外漢籍國際學術會議論文集』國學文獻館、臺北、一九九三年)

(18) 『杜詩診解』に書誌面からの接近が窺える先行言及として、以下のよ

分な整理がなされたとは言えない。

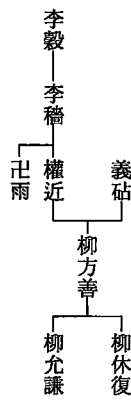
- a. 李丙疇『杜詩諺解批注』、通文館、ソウル、一九五八年
- b. 同『杜詩研究』、探求堂、ソウル、一九七〇年
- c. 同編『杜詩研究論叢』、二友出版社、ソウル、一九八二年
- d. 全在昊『杜詩諺解論釋』、宣明文化社、ソウル、一九六八年（八五年にも同名書）
- e. 同『杜詩諺解의 國語學的 研究』、宣明文化社、ソウル、一九七三年（八〇年にも二友出版社から同名書）
- f. 同『杜詩諺解講義』、學文社、ソウル、一九八五年
- (19) 李賢熙・李浩權他『杜詩의 杜詩諺解』6および7（新丘文化社、一九九七年）
- (20) 全英蘭、文史哲出版社、臺北、一九九〇年
- (21) 「集註杜工部詩姓氏」（勤有堂刻本版）『集千家註分類杜工部詩』臺灣大通書局影印版による。・會孟字辰翁批注子美詩。
- (22) 劉將孫「序」『集千家註批點杜工部詩集』天理圖書館所藏本〔會文堂本と元坊刻本の合綴〕による。大通書局影印版〔靖江王府刊本〕『集千家註批點補遺杜工部詩集』には劉將孫序が無い。・藉吾家名以欺世者。
- (23) 劉辰翁のもの朝鮮版本は、論者が點檢したものでだけでも以下のようである。
- a. 甲寅字版『増刊校正王狀元集註分類東坡先生詩』
- b. 訓練都監字版『増刊校正王狀元集諸家註分類東坡先生詩』
- c. 甲辰字版『王荆文公詩』
- d. 訓練都監字版『須溪先生評點簡齋詩集』
- e. 乙亥字版『須溪先生批點杜工部七言律詩』
- f. 朝鮮整本『須溪先生批點孟浩然集』
- g. 朝鮮整本『須溪先生校本蘇州集』
- 朝鮮における集千家註系杜詩について
- h. 肅宗代版『世說新語補』 等
- (24) 注(8) 参照
- (25) 黒川洋一「解題」(天理圖書館善本叢書『集千家註批點杜工部詩集』一九八一年)
- (26) 周采泉『杜集書錄』上、上海古籍出版社、一九八六年
- (27) 島田翰『古文舊書考』卷第二、民友社、一九〇五年
- (28) 洪業『杜詩引得序』(一九四〇年、今は『杜詩引得』上、上海古籍出版社、一九八五年)所收のものによる) 等
- (29) 洪業 前掲書
- (30) 周采泉 前掲書
- (31) 李丙疇『杜詩諺解批注』、通文館、ソウル、一九五八年
- (32) 『樂章歌詞』上「翰林別曲」；高宗時諸儒所作(中略)(第二節)唐漢書。莊老子。韓柳文集。李杜集。蘭臺集。白樂天集。……
- (33) 『高麗史』卷一百十、列傳卷第二十三；王嘗欲觀李白杜甫詩。宗愈曰。抽黃對白。無補於政。王命進之。宗愈托以無典守者。竟不進。
- (34) 『世宗實錄』世宗十五年七月丙寅；太宗大王嘗欲觀杜詩。臣先父臣近以爲非人君之所當學。
- (35) 注(15) 参照。
- (36) 『世宗實錄』世宗二十五年四月丙午；命購杜詩諸家注于中外。時令集賢殿參校杜詩諸家註釋會粹一。故求購之。
- (37) 李丙疇 前掲書
- (38) この考證は注(9)の沈慶昊(1985)・沈慶昊(1986)・沈慶昊(1992)に詳しい。沈慶昊氏は京都大學文學部所藏本を影印・刊行している。
- (39) 李丙疇『杜詩諺解題』(『杜詩研究論叢』二友出版社、ソウル、一九八二年)
- (40) 注(16)の金訢「翻譯杜詩序」参照。すなわち、『纂註分類杜詩』を

底本とする『杜詩諺解』のことではあるが、分門類聚。一依舊本。となす。

(41) 注(36) 参照。

(42) 『稗官雜記』四：湖陰以草堂之註太繁。依趙杜註例。刪去其冗。而存其要切。且添入劉須溪批語。書未成。金慕齋爲提調。以爲草堂註不必刪也。令印以全註。覽者恨之。

(43) 池浚模『杜詩諺解』의 註釋과 翻譯에 關한 考察』(『藏菴池憲英先生華甲紀念論叢』弘文閣、ソウル、一九七一年)は、杜詩學に關わる學問の系譜として次のよう整理している(抄)。



(44) 『世宗實錄』世宗二十五年四月壬午：卍雨及見李穡李崇仁。特聞論詩。稍知詩學。今註杜詩。裕以質疑也。

また、成俔『懷齋叢話』卷之六：釋屯雨(すなわち卍雨)者。幻庵之高弟。自幼力學。内外經典無不探討。精究其意。又能於詩。詩思清絕。與牧隱陶隱諸先生相酬唱。

(付記) 本研究は平成八年度文部省科學研究費(研究課題「分類杜工部詩

諺解」注解類の系統に關する研究)の助成による成果の一部である。

また、資料面で協力くださった高麗大學の沈慶昊教授にこの場を借りて感謝申し上げます。